





門へ道13  
1897  
巻 9

笑談貧福軍記三編卷之下

浪華 一荷堂主人戯編

第廿回 貧不降りて安好寝松の城をま見る

是首小福方の烈国司擅州奢の城主由指衣紋之介  
安好の其身富門又生さくさく常小豆ことをあふは榮花  
の限りを仕つとんと籠はる日ハ掃子して翫水遊山小  
黄金どらら。昼夜酒色小酌ハ家業勅を志却  
あ。妾宅別荘は花養をつく。終日遊戯は乘



八、前、三、冊、一

三、五、二



してハ春の日蔭も短くと思ひ。羨婦と會つる肉屋  
 小秋の夜とて長くとせど。羨食羨服も倦果る。  
 麒麟の鮮もあひをりふ。得ざるは漢土の富物を集め  
 せとく。増長するふあつた。是又諛ふ佞人ふハ太鼓坊  
 弁狸。糟利取空門。山居養十齋もど。何とも側を去  
 どく。糞掃も豆入とく。ひつ附さくく。居るやどこれ  
 へ上乱さく入下治まふ。是とくふるふ家の長臣塚守  
 減重門。有金とく。始末仙右郎。實無。昼寐。土郎時

長るど。つづまふあつた。浪者も。君制でされハ臣も謙  
 ぞ一寸先ハ闇雲も吞やらく。や踊とくと。旅傷無頼の身  
 持もく。人其教をも極る。期ハ樂とく。悲とく。と  
 斯く。歳月あつた。とく。富る家蔵も。間遠がひ  
 らけてハ戸前とく。合ぬ。兼用の。衣の。身代とく。と  
 柱の根つだも。あつた。家賃ハやがて。他人の物とく。と  
 りり。福者の交りも。仕ら。ゆる。あつた。娑好の。曲の。とハ。家  
 老も。あつた。其の。身ハ。ひそ。不立退く。とく。と。別荘



病氣と号て閉籠り。またく不善を行ひる。不道屋  
 貧乏福年乱翁。盛表山の一戦を風は此所は聞し。八  
 と歡樂城も走行ど云甲斐も目とある。今六  
 次第小困窮。榮曜榮花はさくみだす。三回の  
 食事も覺束る。是は依く此項へ已前も志した  
 福將。ありく助情を請とく。奢りも長ゆる。あま  
 らへ君の大事の命小背く。不忠の姿好誰一人助情を  
 るものあり。あまバ。必死の身とある。尚さ

已どあく。人を怒り。或は怒り。全とる。あま  
 時小一族あひやく。吾今福者小産とる。あ  
 ら。係る貧苦小迫るとく。あま。貧乏小味方せらる  
 へ。是義を重ん。忠を志とぬ。あま。然る小此程  
 且朝の米糧もつ。あま。不止得らる。無心をたの。あま  
 する小。氣野長登守春豊の文。あま。聴らひ。あま  
 あま。あま。我小對し。あま。不忠も。あま。恥辱を。あま  
 條。あま。至極の雜言あり。係れ。あま。我今何さ。あま



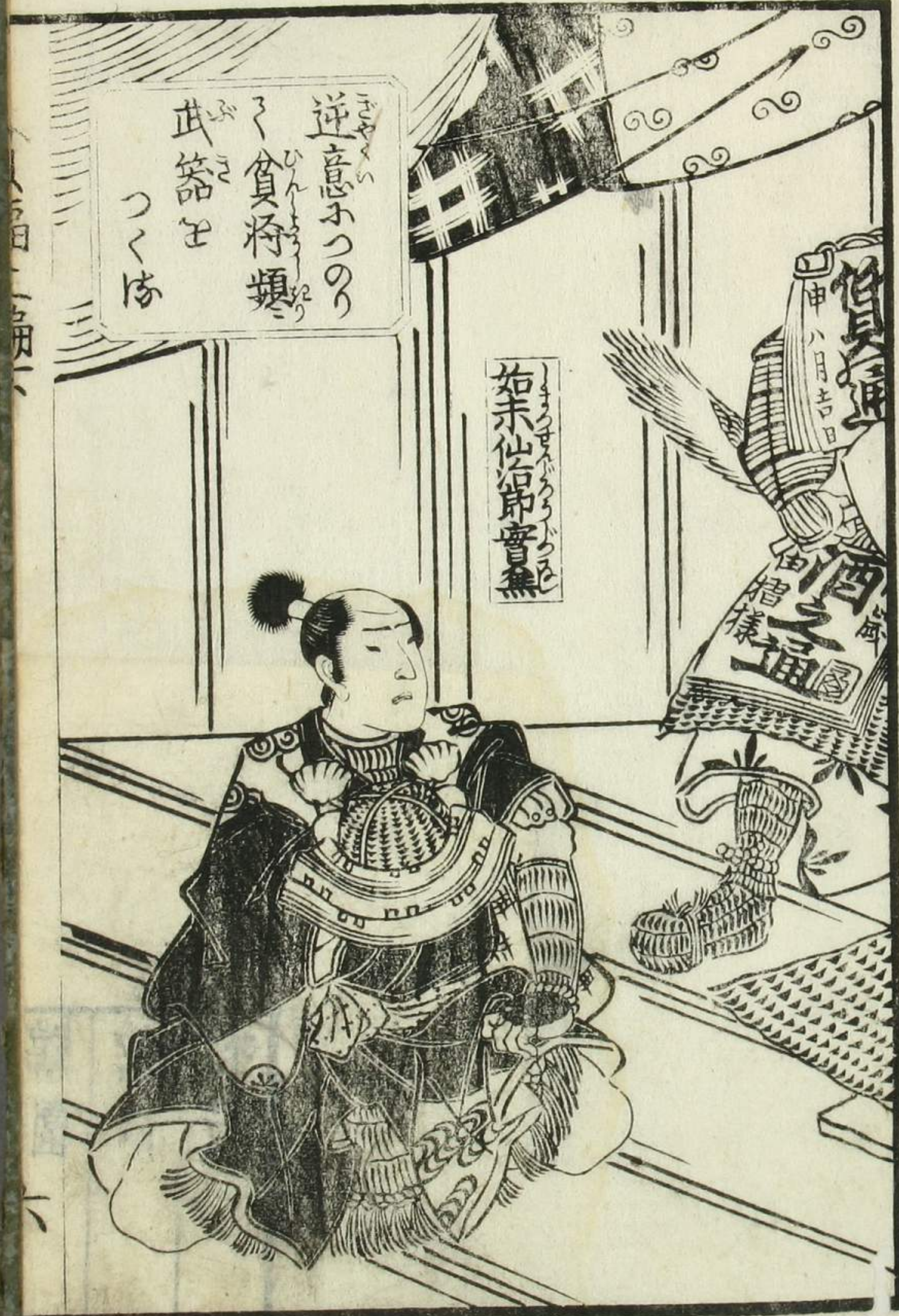




程遠くぬ森松の城は捍寄に大将たる氣野長登  
 守春豊を只一戦より亡し是を平初の功として味  
 方よのるに尚ほ専申の定也と云ふは又まうしく云はれ  
 一同とすとのりとも同じ。そよより専ら用意をせし  
 置の表を引えりて鑑を造る者何とて紙屑を置ての  
 ぶとる。或は紙を紙より張むの叙ふ今ある  
 を礎とせんとす。其の火吹竹は茶臺をさし。刀の  
 思ひふ帯とて破て布の風呂志を纒のりりよ

する者あり。嘆挿物へ等行はるる物たるを  
 け。さるるが。靴も化さす。か又ハニの力の行烈う。その  
 戯氣つるるぬ。既又用意も調ひませ。ば  
 ちろな夜討をせしめのと。勇を立ちそ待居り。爰ハ  
 福方の大将果報森松の城主氣野長登守春豊と云  
 へ此項本城は在り。不断優長ハ朝食を喰ふ。ハ  
 午刻過し喰終る。昼飯ハ夜の初更に箸を納る。食は  
 仕まの翌朝ハ。湯は浴ハ二日とあがら。たぬく氣





逆意おのり  
貧將類  
武器を  
つくは

如未仙郎實無

酒之通  
槽様



由指衣紋家婆好

大太鼓坊弁連

借金扣  
北元年  
月吉日

金身三續一



のるみその時ハ我庭先をん安行ある。亭坐席みて三  
 夜も宿り米一粒づつよんぐ。飯をたうせ。饒ハ燈明の灯をて  
 何ある。山が搏て。容易よその座を動うさる。實見とて  
 大失夫あう。今宵ハ書院又家臣を何つ免。三百年かど  
 まへうこの集用ちがひを調べんとく。各く古帳あるべく。こ  
 氣長ハ勘定さる折し。かみひがひみるく。あやむ。注進  
 とて呼り来る。ふ。何ぞくたぐぬ。彼者庭又色らそ  
 下げ。正しく敵ハ何者ある。つ。志ぐ其姓名ハ分るべも。

だ。も。小。分。貝。性。と。る。冬。く。つ。ど。の。破。障。先。又。相。持。立。よ。の。時。を。
 借。我。余。騎。今。城。外。な。う。り。田。と。鯨。を。作。つ。く。は。言。る。か  
 春。豊。藤。み。ぐ。猶。も。う。な。る。る。氣。色。も。あ。く。觀。然。と。して  
 申。る。ハ。要。等。が。如。何。か。と。寄。る。も。あ。ら。等。の。う。く。城  
 門。を。守。り。相。手。お。る。と。は。と。捨。あ。げ。し。先。と。さ。す。の。ハ。あ。の  
 動。走。と。と。合。せ。う。仕。舞。ら。ら。へ。く。腹。が。減。て。ハ。黙。ひ。あ。ら。  
 り。も。も。暑。ひ。茶。飯。を。食。ひ。田。も。く。敵。を。さ。せ。く。へ。と。  
 三。月。間。ハ。一。歳。お。百。も。續。く。あ。る。こ。う。く。納。ま。る。こ。の。下。知



と聞並居る家臣の面々も又とて主人と相慮して。  
 つらきも氣長たへる事と余の事や思ひ入り當家の  
 一族長居氣右門春待同家臣早鞠内記時待希と  
 小しゆと申りるハ君の御錠よりへとも。余の義とては  
 今眼前又大敵を引請ひるハ家風をぞとて。今宵ハ  
 ちかぬ古帳を其上茶飯の愛ひのを喰ふべし  
 所又あり。斯安閑とる事とち又結地倉庫の氣短とる  
 り。城中ハ来入の味も大井ある人だある。とてく

防戦手配の正下知ありて。為るべしと進免は漸々立ち  
 三指庫の納る具置掃をとる出せ。さるべしとて  
 を着し。とてち新中とて。持口場所を手配し。と  
 準備へこそとて。去りて城外ある倉庫の事をたつる  
 ころの無心とて。一錢もつる根とて。其勢ハ破行のとて。  
 大將由指衣紋之助姿好ハ自ら真先又馬をとせ。さるべし  
 士卒小下知とて。大手の門前近くとて。大喜上ハ呼ハ  
 なるハ如何ハ春豊よとて。け我福方小何の時ハ隣國の



好ことせむと云。祝儀佛夏の宴應もる。汝を上座は招き寄  
 尊敬せしむる恩を志せ。今もく零落もる。一  
 の助情も謙ひさば。刺さへ吾と嘲り笑ふよ。言詰同  
 奇快あり去まよ。我今もく薄情なる。福国の仲間小  
 何つと。爾もあつ。真切もる。貧國の味もとる。手始小  
 汝を十分借倒し。夏好も見参する。いな一勝負受  
 とす。出まくと呼まこと。赤も此時は城中へ或は帳幕  
 方附り提灯籠をさる。と速も出火をさく如く静り

優長小のあへる也。誰う一人聽者も。静りもつと。人  
 けま。姿女好大も小張合も。カ一明滅小へこまも。人  
 と。暫時も。ひるも。彼方の櫓も灯もけ。人  
 此方の門も。立もと。衝も手。融も。スワヤ者共  
 りち破也。中へ人の住城もると。云つ四方をうけ。回も。バ  
 是も氣を得も。太鼓坊も。輕。槽利取も。塚守も。有金  
 山居養仙齋。昼寤時長。始末仙二弟も。と。吾も。人  
 りの倒も。と。口先も。りの向も。は。びつ。つ。る。様も。鉄



鉈をんを。みたりと灰吹る。大蛇の出る勢ひも。  
 責立くけ向ふ。此城郭の要害へ原より黄金も。  
 せしうへ造作をえん家風のど。工手間をいとし木柄  
 を擇む。歲月あぐく建上る。福方無双の名城みせバ。  
 今貧性の瘦腕も。如何やど手びく責むる中。  
 落城をべたやうも。思ひど時刻もうつる程。又城中次  
 弟小手配とのひ寄手を相手小こころせバ。ふせバ  
 と免る一銭も。倒さまよと戦ひらる。是も福方瀬手

の大将石臼居土郎尾長へ。いと尻重た者も。中可手  
 八由摺衣紋之助ありと。聞より面は怒りをあぐく。彼奴  
 福方も。あつるあつる。己が性根の根柢も。今貧勢とるも。  
 下り。あつる福者も。又向ふも。憎さ奴らのあるまじき。  
 イデ石臼が飛出。貧乏の鼻を。へやびて呉を。  
 我手の士卒も。下知を。へ城門八字小を。開き群り  
 よろする貧軍も。面も。あつる割る。り當るを幸ひも。た  
 倒し。轉ひ回る勢ひも。何れも。たぬるべた重た尻

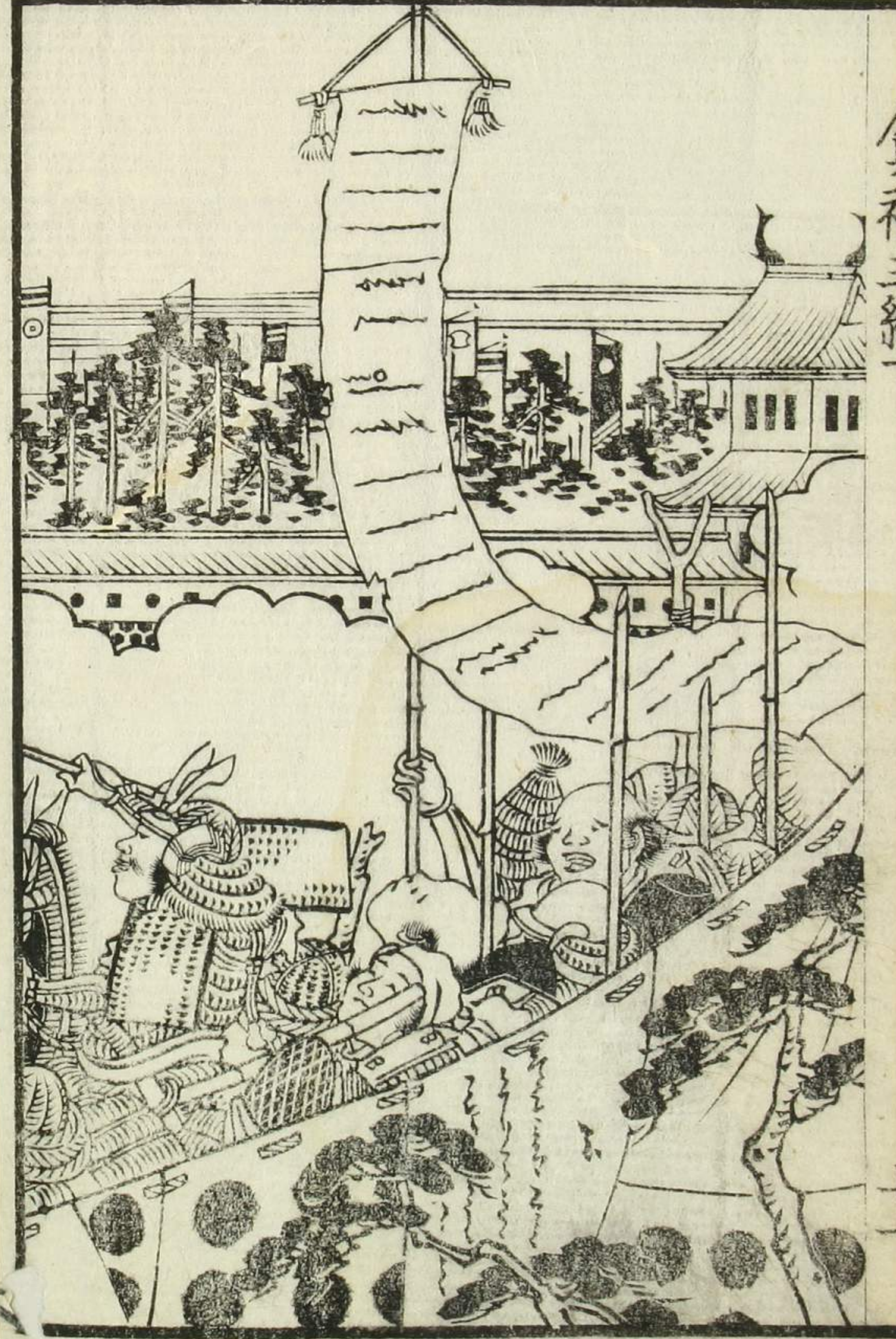
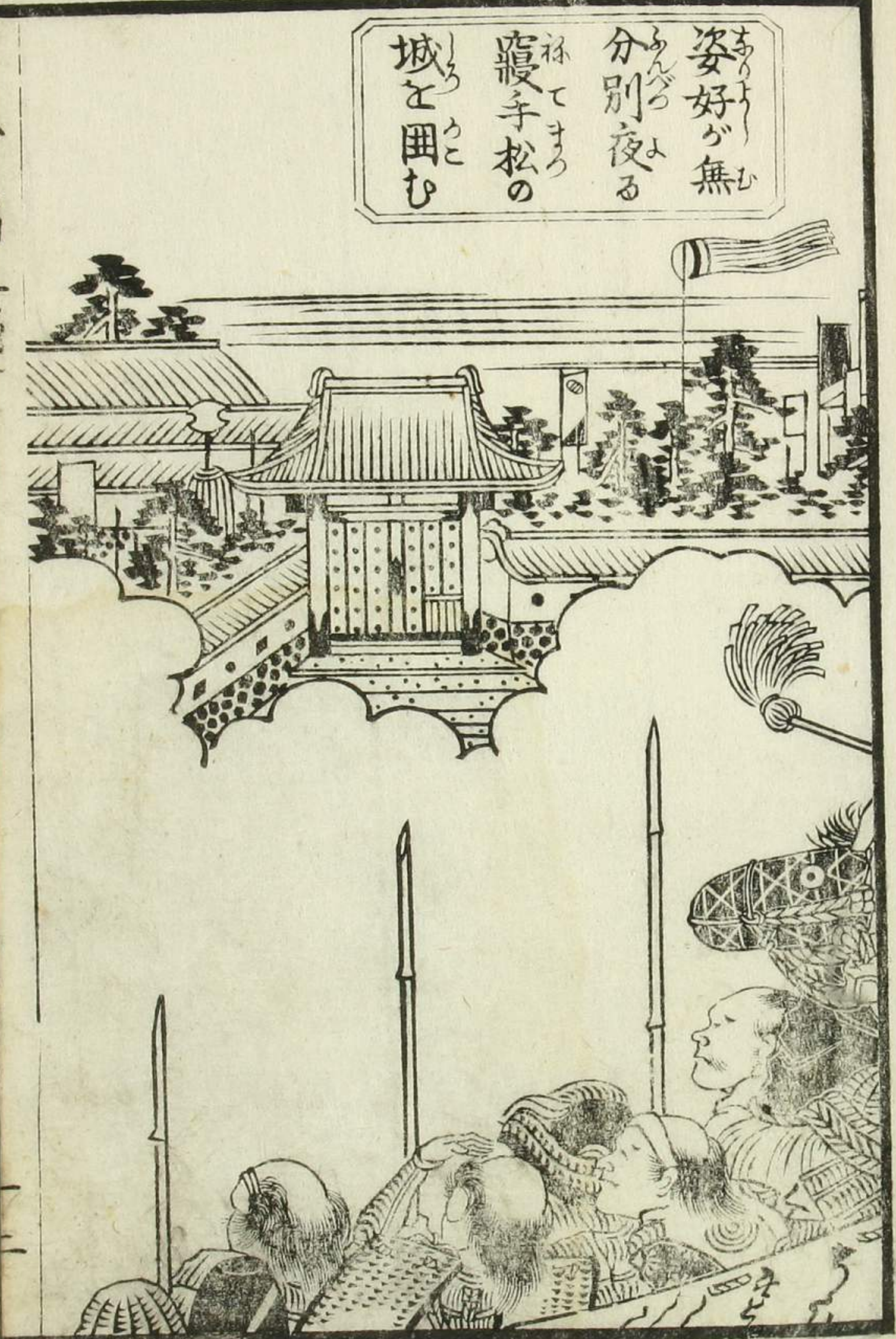


小押つげらま。或いふま。又ひひがま。實引白の働ま。お  
 さりの金勢粉のどろ。四方へをつと。逃ちのる。城中是を  
 るる。よろも長井氣右衛門春待を。免長夜秋之助明兼ホ  
 鼻毛を抜る。ゆるゆる。敵ハ正しく。肩色あるそ。い  
 この時又追ま。と諸軍又下知。是も又大手の城門  
 かり開き。今石臼の勇力。乱ま。るる。金軍の前後を  
 のここ。一人も。渡さ下めの。と真立。たあ。お此晦日  
 苦した上。不當。其頼母子。落る。如く。防ぐ。手企も

あぶこそ。惣一統。小を。立大破軍。とぞ。あふ。ふる。福く  
 いよく。勝小乗。と。進。い。で。逃。ぬ。敵。と。追  
 討。其。い。わ。ひ。當。り。と。金。將。衣。紋。之。介。姿。好。ハ。眼。を  
 い。じ。色。を。上。り。が。あ。る。た。味。方。の。奴。原。下。ん。又。ち。や。ら  
 ぬ。其。口。先。又。依。氣。あ。る。べ。ん。ぐ。ね。り。あ。ち。明。さ。る。  
 り。も。氣。長。た。福。が。小。後。ろ。を。ん。さ。る。こ。と。や。あ。る。あ。合。せ  
 女。や。が。と。色。を。限。り。不。呼。り。つ。か。り。拂。の。紙。手。ふ。り。回。し。  
 怒。り。と。も。下。知。を。れ。と。何。條。と。色。を。さ。く。べ。ら。や。雪。隠。る



姿好<sup>あやう</sup>が無<sup>ひ</sup>  
 分別<sup>ぶんべつ</sup>夜<sup>よ</sup>る  
 寝手<sup>ねて</sup>松<sup>まつ</sup>の  
 城<sup>しろ</sup>を囲<sup>かこ</sup>む



金<sup>かね</sup>福<sup>ふく</sup>三<sup>さん</sup>綱<sup>づな</sup>



色いろを拈ねんせよとく。誰たれ一騎いつき止とどめる者ものも。素もとより志こころきつる不ふ人じん  
 情じやう者ものの寄よ會あひりくる良よ等とうも。耳みみふるのけを逃のが行ゆくる  
 の天てん狗く風ふうとりのふのふ。輕かろ業わざ小こ家やを吹ふ上あごご。ごご半はん疊たか  
 や違ちがひのこひ。紙かみ屑くず竿さん竹たけうち交まじり砂すな煙えんとめりとも。宙ちゆう宇う  
 おとんと走たるあり。目めもあててきぬこと。もあつ。係かる  
 ところふ何なん国こくより。分ぶん員えん軍ぐん一いつ羣ぐん湖このこく。思おもひがけり  
 起おこり。福ふく方ほう城じやう兵へいもち。乘まト。大おほ方ほう諸しよ軍ぐんをくりごり。衣え紋もん之の分ぶんを  
 追おうち。又また出いでる。何なんとの空くう虚きよある。城じやうを目めがけり

搦な土つちの門かどより。どつとどつと。わをころり。あえき。叫こゑんを責せ入いり。まひ  
 城中じやうちゆう大おほび。又また狼ろう吠びさ。だ。不ふ意いと討うき。こころも。まぬ。む。む  
 だ。ふ。者ものさ。へる。上うへと下したへ。と乱らんき。こころ。本ほん丸まるさ。て。あ。け。り。と。  
 得える。や。應おうと。分ぶん員えん軍ぐんの。を。死し間まも。あ。ら。せ。は。突つく。る。と。あ。る。と。  
 も。あ。ら。ん。と。く。春はる豊とよの。忠ちゆう臣しん。早はや鞠きく内ない記き時とき待まち。我われ持もち口くちこ。こ  
 く。守まもり。嚮むかより。城じやう又また残のこり。居いり。不ふ慮りょも。分ぶん員えん責せ来きり。今いまも。あ。ら。ん  
 り。も。小こ乘まへ。と。聽きより。是こゝ所ところ。走は来きま。早はや分ぶん員えん勢せいの。い。や。ら。ん  
 猛まうく。本ほん丸まるさ。と。責せ入いる。を。横よこ合あ目めが。け。り。あ。け。向むかひ。ふ。せ。を



止免々戦ひけるふ。そも何者り此金貨軍。止くそむよあこが  
 ひく。一群人物臭ふこと。瘴と無二膏の其中あ。い黄の花の  
 香をまぶく。その臭たことひくさる。福か。是は身とい  
 そまを互ひ又鼻を覆ひつ。心悪さ小猶強さるぞ。あん  
 やよあまあくもあぐごそ大軍一同は責まき。流石の早鞠  
 内記も。この可やと馬引さ。本丸さして外入つ。此大  
 将の以前は出ある味この難戦るま。一先この場を退  
 けのへと鐘よとがのく。進免々き。是非多く。今ハ春曲豆と

無法の金貨者の勝と。たのい。無念あま。裏門は。斬やく。一方切  
 開く。死言并鉄石入道が石橋城へも落行る。そも是首小向い  
 貧將を何人ある。そこのあ。是も又二面將監が遠謀も。今齋  
 由指衣紋をか。此城は夜討さる。得る。是を悟り。故  
 姿好の敗軍をさる。一旦福方の討。又城中座座を附。以て  
 貧目の大名貧州股垣の城主。身内小倉守瘴盛。又ひ  
 引。方更を云ふ。と。偕こそ。爰は。向を。さる。こが。瘴盛。興  
 思の。障。城。を。兼。取。尚。示。手。勢。と。二。手。小。分。ち。衣。紋。之。分。を。殺。心。と。







